おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和元(2019)年
6月号
通巻586号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　令和元年6月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

紫陽花と観音　　青森県弘前市　石田勝利さん撮影（文・８頁）

再録　『すさのお』紙より

庶民の生活に深く根ざした土着信仰（全16回）

法主　矢追日聖

（九）

昭和43（1968）年7月23日発行
『すさのお』第22号より
（法主、満56歳）

太平洋戦争に敗れるまで、日本は天壌無窮にして万世一系、天津日嗣の御子たる天皇をいただくことが、万国に比類なき国体の本義であると、国民は徹底的に教え込まれたものである。

私達の青年時代にあっては、こうした天皇中心、国家主義的思想は、一部の人々を除く外は別段不思議でもなく何の抵抗も無かったのであるが、そこには私達が住む日本が、世界的に色々な面において成長していくこと、それは取りもなおさず国の弥栄であり、国民全般の生活向上に結びつく喜びでもあったからだと思う。

古代人にとってのスメラミコト（天皇）

アジア大陸の東の果てで、蜻蛉（とんぼ、秋津）のような小さい島国日本が、西隣りにある大陸の人々と物質的、精神的に交流をもち始めてから凡そ二千年の歳月を経ていることは歴史上明らかな事実である。二千年と一口には言えるけれど、随分長い年月である。その間には我々が思いもよらない国家の危機も何回か

あったことと思う。

幸いにしていかなる過去があろうとも現在の日本を今日あらしめた事実は、すべて天皇を含めた私達の先祖に負うところが多い。思うにそれは、国民の宗家であった皇室、国民の総親として尊敬し愛慕したスメラミコト（天皇）、こうした忠君愛国的な精神内容が曲がりながらも日本を護り続けて、現在をあらしめた根本的な要素であったのではなかろうか。

仏教渡来と共に、支那朝鮮から彼らがもつ文物・制度まで流れてきたため、あらゆる面において当時の我が国は、かの欧米文化を摂取して明治政府を樹立したような一大変革期に遭遇したことと思う。

私の心の中に実在しているスメラミコトは、政治的権力者として最高の座を占めている形の天皇ではなく、昼に夜にいつもカミ（神ながらの大法、自然が示している心）の代行者の立場にあって、歴代の万霊（姿なき人間、大祖親等の人格霊）によく仕え、現界幽界を結ぶ心の交流をはかりながら両界の弥栄を祈る資格者であらねばならない。古代の日本には民族の宗家であった皇室の中に、この資格者が生まれますとの信仰をもっていたようである。我々ではこれが真か嘘か判定する能力や資格がないので、信じられる人は幸いである。

『日本書紀』（七二〇年成立）の巻二に記されているところによれば天孫降臨に際して、天照大神から賜わったという神勅の中からも、スメラミコトに対する古代人の心を窺い知ることができる。

「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫、就て治らせ。行矣。宝祚の隆えまさむこと、天壌と与に窮り無かるべし」と。

政治権力が諸神等を冒涜する

明治、大正、昭和の御代に君臨している天皇の在り方の認識においては、古代の如き信仰の対象的性格をもつ現人神であったスメラミコトをおしはかることは、とうてい難しいと思う。清純な仏教徒が釈尊に帰依するが如く、キリスト信者がキリストを天なる父、或いは救世主と仰ぎまつる如く、スメラミコトに対する古代日本の民草らの心情は、誠にこれらに一脈相通ずるものがある。

戦時中、私が東京で暮らしていた頃、大元帥陛下（天皇）の胸にきらめく数多な勲章はどこの誰から賜わったものかと聞いたところ、牛込の憲兵にどぎつく叱られたことが思い出される。今では笑い話で済ませる有難い世の中になったことを心から喜ぶ。

伊勢で祀る天照大神は別格の大社であるが、その子孫という神武天皇を祀る橿原神宮は官幣大社、天磐船に乗って天降ったという饒速日命の登弥神社は、二千六百年記念でようやく県社に昇格、農山村にある鎮守の杜に祀る天照大神や素戔嗚尊は村社、布都御魂大神を祀る官幣大社石上神宮には天照大神の祖神に当たる高皇産霊神、神皇産霊神を摂社に祀っているなどの形を見れば、どうも歴代祖親（人格神）に対する現界人の崇敬の態度がなってない。

言うなれば、それは祖霊を祀る神域や建物について、国家が保護維持するために与えた社格だろうが、こうした行為そのものが、祖神に対して許し難い大罪であり冒涜と言わねばならない。

政治権力の中で生き、御祭神を無視してきた神社の在り方は、同じくこれと直接間接に関連性をもつスメラミコトの本質をも蝕みながら現在に及んでいると私は見たのである。

このような根本的にゆがめられた神祀りの現状では、恐らく諸々の祖神も平穏に天津磐座に鎮まることは難事中の難事と思われる。祖神といえども我々と同じく、異なるところはただ肉体をもたないというだけで、喜怒哀楽の感情もある。現在社会を見て気になることもあろうし、また言いたいこともあると思う。

ところがあまりにも通じないため霊界人は挙って、実力行使で現界の人々に何らかの現象で伝え知らせている。

ここで私達は人々の気の動きから始まって、天災人災その他、我々の視野の届く範囲において見るすべてのものに、心鎮めて静視すれば、必ずやその人なりに祖神たちの想念に相通ずる何ものかが感受できるものと思う。

神社が国家管理からはずされたことや、天皇は象徴としての存在に変化したことは、日本がもつ生命力を一段と強化したことで何よりも有難き極みである。敗戦は岩屋戸の裸神楽に引きもどす一里塚であったのかもしれない。

（十）

昭和43（1968年）8月23日発行

『すさのお』第23号より

（法主、満56歳）

私は大阪の谷町七丁目あたりで、交通の頻繁な道路の中央に祟りが恐ろしいからといって、現在までそのまま放置されている枯れた楠の古木の話を、本紙四月号（第十九号）に一寸取上げたことがある。それが切っ掛けとなって、この件につい

てこの間、大阪から或る人が訪れて来た。

彼は楠の古木について次のようなことを言ったのである。

――あの楠の古木は、近所の人々が永年恐ろしがっているし、また信仰すれば御利益もあるという、言わば信仰の対象物になっています。今、その古木の所有管理権は大阪市当局のものとなっているとはいえ、そうやすやすと取り除くことは難しいと思います。実は市の方でも、万国博までには取り除きたい意向のようだし、市議会の方でも取ることに決議されたと聞いているのですが、それがなかなかうまくゆかないようです。上の方では簡単に話が決まるのですが、さて現場を受けもつ側ではやはり、ビビルようです。

あの近くにも、もう一ケ所道路の真中に枯れた銀杏があるのですが、これもこの木の根もとに神さんがいて、これを信仰してからトントン拍子に栄えたという家が近所にあるので、市の方も手こずっているようです。大阪では住吉署の柳の祟りという現実問題もあり、役人といっても個人家庭をもっていますから、「さわらぬ神にたたり無し」ということになるでしょう。

とはいうものの、考えてみればこういったことは将来も公衆に多大の迷惑をかけるものですから、私個人としても、取り除くに適切な方法があれば幸いなんですが、如何なものでしょうか。

――ということだったのである。

納得すれば霊体は遷座する

実のところ、あの楠の古木がこんなにも緊迫した事情のもとに置かれているとは知らないで、ただ「自然物崇拝の根底」を書くのに恰好の材料だったから取り上げたにすぎないのであるが、見方を変えれば、こうなることも、そこに楠鎮座の霊体と何か関連性をもっているからとも思えるのである。

仮に、この楠木を邪魔だからといって完全に取り除こうとするならば、枯れた楠木をヒモロギとして棲まっている霊体の移転先を選定しなければならない。できることならその近所が望ましい。そこでお社に鎮めて祀ればよい。簡単な話のようであるが、実際にやろうとすれば、不可解な難問が起こってくるものだ。

どこの宗教にも遷座のための祭礼や秘法はあると思う。しかし厳粛にその方法を行ったとしても、必ずしも霊体が歓んで遷座し鎮まるものとは限っていない。霊体の方で受け入れなければ儀式は単なる猿回しの芸にすぎない。

私はいつか顕祭と幽祭について話したことがあるが、顕祭はただの猿回しで、師匠や先輩から祭礼行法など形だけを修得するだけでいいのだから、普通の人なら誰でも出来ることだ。

幽祭は簡単に修得できないもので、これは先天的にその人なりの命に応じてもっているものである。人間相互間では幽祭可能な資格者を見出すことは凡そ不可能であるが、地球上に生きる何十億の人間の中で、もしたとえ一人でも幽祭の資格者がいれば、数知れぬ霊界人は悉く容易にその人を探知できる。

霊界人と幽祭資格者

霊界人ならばすべての者がその資格者を知ると同時に、何とかしてその資格者との結びつきをもつための、必要な具体的方法を講じるのが普通である。

霊界人の方は、人間社会にある、いろいろの宗教団体やその宗祖・教祖といった、人間が認めた資格者などは問題にしていない。

霊界人は我々が加入しているいかなる宗派・教派にも所属していないのであるが、生存中に人間的向上のために所属していた宗教から汲み取った本質的宗教味は所持し、その味を霊体栄養として死後の生活を続けているように私には見える。

例えば、我々が洋風和風といった暮らし方をしているのに似ている。どんな生活様式の中にあっても、幸せをもつ人もあれば苦しみ悩む者もある。要はその人の心の中に、人がいう天国とか極楽を作り出すことである。

楽々と生活している霊界人たちは誠に少ない。この霊界人たちは現界人との交流によって、たとえ一歩でも苦しみから解脱したいと望んでいる。御霊鎮めは、こうした霊体に必要なものである。勿論、霊体の格にもよるが御霊鎮めのできる人は、幽祭の資格者でなければならない。でない限り、霊体は鎮まらずにただの猿回しの演技に終わるのが落ちである。

いま問題の楠木に棲まう天狗さんや巳さんを鎮めて遷座してもらうことは、私には日常の茶飯事のことで、過去三十年近くの歳月の間に数知れないほどやってきた事である。

私は宗教法人大倭教の創始者ではあるが、私が鎮めた霊体と大倭教とは何のかかわりもない。ただ私個人との関係をもつことになる。現界の私が、仏教であろうと、キリスト教であろうと霊界人はこうした私の宗教とは凡そ無縁の立場をとる。

私が言うように因縁深い谷町の近くへ幸いに遷座することが出来れば、もと信仰していた近所の人々によって日々お給仕をし、祭典には高津さんか生魂さんあたりの神主さんに頼んで祭礼行事をやればよいのである。（つづく）

3月号表紙写真によせて（続き）

全ての命は一体として繋がっている

奈良市　井手泉

手前のルリセンチコガネが、上のサワガニの餌になることもあり得た。自然はきびしい。

どんな生きものでも、スズメバチや巨大なムカデやマムシ、危険なウイルスを運ぶ蚊やマダニであっても、生きものには命と魂があり「機械ではない」ということです。それらの命の本質は、私自身の命と同一のものであり、それらの魂は万物を生成化育する大自然の根本心霊の分霊（わけみたま）だと思います。

ですから「毒虫たちが身辺にいる危険」よりも、「それらが身辺にいなくなる危険」の方が、はるかに重大で深刻な事態と思わざるをえません。

私の居住している奈良市内のあちこちで、ワザと蛇や蛙たちを轢き殺しています。そのために、水質の汚染に伴って絶滅していくものもあるし、どんどん稀少種も減って消えつつあります。勿論、私の力の及ぶ限り声を上げていますが、あまりにも無力です。せめて私の身近な町内だけでも、無益な殺生を少なくしてもらっています。

百年以上も前から既に始まっていた、近代科学の機械論的な世界観に歯止めをかけ、全ての生きものに敬愛と慈愛の気持で接し、共生して行く必要があるのではないでしょうか。その祈りが通じ、諸々の生きものとの倫理的な関係が自然に生まれるのは素晴らしいことです。全ての命は本来一体として繋がっており、人間だけ幸せになれる道理はありえないからです。

人間の心が砂漠化し、地下水が枯渇し、人類同士が悲惨で空しい殺し合いをすることがないように、心がけて生活したいものです。（柏手・合掌）

編集部の補足

これでは書き足りないのだが体調が悪いとのことなので、お話を聞いて補足する形にしました。

最近、蛇も駆除の対象のようになっている場合があることに井手さんは警鐘を鳴らされているのですが、その深い意味を、平成22年新年号の井手さんの「〆縄と蛇の話」より引用しておきます。

【昭和41年1月23日発行の『大倭新聞』で、法主様は次のように語り口調の文章で述べておられます。「古代人が…略…門松は夫婦の形とその心的内容を神に示し、鏡餅は子や孫の弥栄（いやさか）を祈るために神に供え、特に〆縄は宇宙創成の神威を具象的に表わしている。陰性、陽性と仮定した二筋の藁をねじ合わせ、完全に一体となった時の姿を現わすのに、波状的に噴出する両者一体の気を、白紙で段々のたれを創作し御幣と称してつけたあたり、まさにかしこみ、恐みだね」と。

この記事には、古代日本人の敬虔な自然崇拝の心の在り方がわかりやすく示唆されており、〆縄については、実際の蛇の交合の様子を彷彿させ、私達の先祖がそれを身近に観察していたことを覗（うかが）わせるものがあり、新たな感銘を受けました。】

大倭会文化行事報告

平成31年4月21日　第341回 新緑の手向山八幡宮へ

大阪府枚方市　林　修三

平成最後の文化行事は、奈良市内の手向山（たむけやま）八幡宮社頭から始まった。参加者は岸野・中村（千）・中本・高橋・李・林の6名。天候にも恵まれ、若葉美しい春の奈良公園散策となった。

手向山八幡宮は東大寺の東方に位置し、天平勝宝元年（749年）、東大寺大仏建立の折、大分の宇佐八幡宮より東大寺の守護神として聖武天皇が勧請されている。菅原道真公の「この度は　幣（ぬさ）もとりあえず　手向山　紅葉の錦　神のまにまに」の歌でも名高い。

平成4年1月19日、最晩年の法主様とご一緒した同地での第221回文化行事には、私自身、想い出深いものがある。あの日、手を引きながら同行した息子も今は32歳となり、時の流れに思いを致した。

各自、自由参拝の後、地続きにある三月堂を過ぎて二月堂へ。ここでは早速、林が担当する文化行事では恒例の、各地の美味しい食べ物・飲み物を尋ね、霊界人と共に楽しむという趣旨の下、二月堂敷地内にある有名なお茶屋さんで和洋のスウィーツをいただき口祭りを行った。

その後、二月堂には法主様の話によると、キシというお祖母さんや生母さんに神意を伝えたという「澄観音（すみかんのん）」がおられるとの事で、各自心を寄せてごあいさつをする。古来、東大寺裏の東山は観音の聖地であり、二月堂本尊の十一面観音をはじめとして、人々の祈念に応じて霊界に現出しているという多くの観音が祭られた様である。その中の「澄観音」とは、果たしてどの様な方なのだろうか。あるいは芭蕉の句にある「水取や　こもりの僧の　沓（くつ）の音」を聞きながら、それら修行僧と共に長く修養を重ねた東山に、古代より棲む多種多様な生命体のお一方（ひとかた）なのだろうか……。そんな事を考えながら、もう一つの目的地、春日大社神

苑の萬葉植物園へと向かった。

萬葉植物園では、万葉集に詠まれた我が国でも古い植物を約300種ほど観賞する事が出来、奈良市内でも私の好きな場所の一つだが、奈良住まいでも「行った事がない」という方もおられて、是非おすすめのスポットである。ここでは「令和」にふさわしい万葉の草花に目を楽しませ、ゆったりとした時に遊んだ。

その後、またもや植物園入口横の「春日荷茶屋」の緑したたる屋外の席で、和気藹々と話に花を咲かせた。中でも美味しそうにビールを飲まれる高橋さんの姿が印象的だった。

最後は、そこからまた徒歩で30分程、奈良町近くで、私の知り合いの方がやっている「若草カレー」の創意あふれるメニューから遅めの昼食を楽しみ、散会となった。皆さん、健脚ぶりを発揮され、心楽しい一日となった。

法主様は、現界で生きている内に、たくさんの人と親しみ、良い想い出を一つでも多くつくりなさいとおっしゃっていた。ありがたい事に、今回の文化行事に参加でき、霊界の方々とも心を通わせ、やはり「文化行事は良いなぁ」という温かい想い出が残され、今もここにある。

縁(えにし)ある　跡をたずねて　往く春の
春日の野辺の　神さぶる杜(もり)

令和元年5月19日　第342回
聖徳太子磯長御廟を訪ねる

あじさい邑　李　章根

全く予期していなかったが、令和元年初めての文化行事は、聖徳太子の魂魄を訪ねる事となった。

快晴、気持ちいい風が吹き、うぐいす鳴く。午前10時半、大阪府南河内郡太子町太子にある叡福寺に集合したのは十三名。十三(トミ)という数字もおもしろい。以前、飛鳥の橘寺（太子生誕の地）で戴いた十七条憲法のプリントを配り、軽く皆で自己紹介。

遠くは神奈川県藤沢から伊藤裕司さん、大阪の高校で倫理を担当されていた金澤秀郎さん、そして地元の青谷義雄・由美さんご夫妻（FIWC関西委員会OB・OG）が初参加され、広島の大崎上島からは中本好子さんが参加された。

まずは、太子自らが廟所として選定されていたという磯長(しなが)御廟（丘陵を利用した円墳で、内部は横穴式石室になっている）にてそれぞれ思いおもいに参拝。御廟には太子（用明天皇の皇子・574～622・49歳帰幽）のほか、膳部大郎女(かしわべのおおいらつめ)（太子の妃）と穴穂部間人(あなほべのはしひと)皇后（太子の母）が埋葬され、三骨一廟といわれている。（写真上）

ついで、法主さんが16～17歳頃より霊的交流をもたれている日蓮聖人の御参籠借跡へいく。日蓮聖人25歳頃、叡山、南都（奈良）へ遊学中、聖徳太子御廟に7日間参籠されたようだ。

松原泰道著『法華経と宗祖・高僧たち』によると、【日蓮の母、梅菊の生家は、日本神道の神職で一家を成した清原家の出自で、敬神の念も深く、「朝日が蓮華に乗って、彼女の懐へ飛び込む夢を見て日蓮を宿した」という伝説】があるが、昭和44年に発行された『すさのお』15号には生母さん（日妙）によるこんな回想を掲載している。

【何や彼やで、あの頃（法主を懐胎の当時）のことは覚えも薄らいでいますが、聖徳太子のお姿が始終出ておられたということ、これだけは、はっきりと残っております。それも年をとられた姿とはちがうて、幼い時の太子の姿でした。あぁ……また、今日も出られた。（略）あるときには幼い太子さんが、わたしの懐に、すーと、はいってこられたりしたこともありまして、おぉ、なんのことやしらと、びっくりしたこともあります。】

法主さんはご先祖さんに、太子2歳の時より内舎人(とねり)（扶育官）であった登美の道麻呂という方をもち、日聖という名も、「霊界の聖徳太子にこの名前を付けよ」といわれ、「宗教的な内容については聖徳太子が色々と教えてくれます」と話されている。（『おおやまと』平成30年12月号）。

各自散策の後、青谷さんのご厚意でなんとも落ち着く古民家のご自宅にお邪魔させて頂き、お寿司をとって昼食会となった。青谷さんの家は、美具久留御魂(みくるみたま)神社（祭神は大国主命の荒御魂(あらみたま)神）の神体山（幾つもの古墳がある）の真下にあり、青谷さんの御計らいにより、2時半から宮司さんのお話を賜わることになった。

その語りからは、誠心誠意神社をお守りし、後世に伝承していこうとされる気持ちが伝わってきた。昨年の台風21号によって倒木など甚大な被害を受けたにもかかわらず、末社が倒壊を逃れたことに感謝しておられた。（記念撮影、下）

令和に入り、気候変動と凄まじいまでの人災は何を意味するか。法主さんは昭和23年に、「昭和維新は大倭から始まる。その心はどこまでも侵略的対立闘争ではなく、和の建設にある」と書き残しておられる。太子から法主へ、そして法主から私達へ。

心に受け継がれるもの

奈良県天理市
喜多村　和人

この度は『おおやまと』紙に文章を書く機会を頂き真にありがとうございます。素晴らしい御縁に大変感謝致します。

私が矢追日聖法主の存在を初めて知り、過去に語られた講話記事や映像、音声に興味を抱くようになったのはごく最近、ここ数年の間の事であります。勿論、法主さんが帰幽されてからの後の事であり、生前の法主さまには会った事がありません。生前の法主さまに出会って色々とお話を伺いたかったという気持ちもありますが、今は叶う事はありません。

しかし私にとっては今もなお法主さまの御意志が働き、大倭に導いて頂いたという気がしてならないのです。

きっかけはシャーマンとして活動されている神人さんの講演会に出席した時に、神人さんと亡き矢追日聖法主との間の不思議な霊縁のお話を聴かせていただいた事だったと思います。霊媒としての初期兆候が顕れて、視えない霊存在からの声が聴こえ始め不安感でいっぱいになる神人さんを、唯一「大丈夫」と励ましていた霊存在が、その当時は誰か分からなかったが、後に確認すると矢追日聖法主であったという神人さん自身の驚くような体験談を過去に興味深く伺いました。

私はその時初めて矢追日聖法主の存在を知り、どのような方だったのだろうかと関心を持ち、今に至ります。

そしてその頃、神人さんの講演会を主催されていた静岡県の野草社代表の石垣さん夫妻や同じく静岡の宮城嶋さん夫妻、松尾さん夫妻と仲良くさせて頂く御縁を頂き、在りし日の矢追日聖法主の思い出や語られた事を聴いているうちに、大倭を訪ねてみたいという気持ちが強くなってゆきました。

私は奈良県天理市に生まれ育ち、学生時代、そして社会人となってからの勤務地として、ながそねの地である富雄、生駒の地に御縁を頂いて通う生活を送っていたこともありましたので、当時は知りもしませんでしたが、矢追日聖法主が語られているやまとの真の歴史を今ではとても身近に、重要な事として感じております。

昨年（２０１８年）の須佐緒祭に思い切って一人で大倭を訪ねてみたのですが、大倭の皆様からとても暖かくもてなして頂き、それを機に禊会にも出席させて頂き、更に色々と深いお話を皆様から聴かせて頂き大変感謝しております。

私が色々な方からお話しを伺っているうちに気付いた事は、それぞれの方がそれぞれの法主さまとの思い出を語られる時、実に活き活きと楽しそうにされているということです。それはとても印象的でした。

それだけとても素晴らしい影響を出会ってきた人々に与えてきた方だったのだなと思うと共に、これまで出会ってきたそれぞれの方の心の中に矢追日聖法主は生きていて、それぞれの心に今もなお優しい大和弁で語りかけていらっしゃる事を心が理解した瞬間でもありました。

月々の『おおやまと』紙にもいつもベストなタイミングで、その時その時に必要な言葉が散りばめられていて、いつも楽しく驚いております。まるで生前に遺された自らの言葉を使い、今でも私達に色々なことを教えて頂いているような気分になる事さえあります。その時は矢追日聖法主が心の中から微笑みかけて下さっているような気がしてなりません。

先日、過去の『おおやまと』紙を整理整頓していたのですが、その時に飛び込んできた法主さまの和歌がとても心に残りました。

現身は　よし朽つるとも　永久に
結ぶ心の　かわるものかは

私はそれまで知らなかったのですが、法主さまの奥津城にも刻まれているというこの言霊（ことだま）を眼にした時、心が打たれたことを憶えています。今もなお、霊界に於いて矢追日聖法主は活動されていて「まぁ良かったら耳を傾けて聴いてみて下さい」という風に、押し付けがましくない自然な語りで、生きている時と同じように私達を繋いで導いて下さっているのだと、私は自分自身の体験を振り返ってそう思います。

ビデオ、写真等でしか見た事がない法主さまの物腰の柔らかい静かな佇まいの中に秘められた熱く強い意志を感じさせて頂く魂魄でありました。心に受け継がれるものを、私達は繋ぎ繋ぎ世代を重ね、歴史を重ねてゆきます。

私自身、法主さまの事、ながそねの地の歴史などをまだ充分に理解していませんが、矢追日聖法主を知る皆様の心を通じて、法主さまが言いたかった事、伝えたかった事を学び理解してゆきたいと願っております。

皆様からお話しを聴かせて頂く事をこれからも楽しみにしています。こんな私ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。読んで下さり大変ありがとうございました。

足あと足おと

自己紹介、または私は如何にして探すのを止めて紫陽花邑へ時々来るようになったか

上野幸夫

たまにしか大倭をお訪ねしない人間がここに書くというのはちょっと面はゆいけれど、せっかく頂いた機会ですのでご挨拶をしたいと思います。

私が大倭を知ったのは18歳頃ですが、初めて紫陽花邑を訪れたのはそれから20年以上も後のことでした。長い空白があったことも、そんな空白の後にご縁ができたのも不思議なことに思われます。私の18歳頃というのは、東大紛争があり、70年安保があり、大阪万博があり、三里塚闘争があり、沖縄の本土復帰があり、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）のデモが毎週のようにありという時代です。私は高校生でした。何人かいた友人は、そのほぼ全員が何色かのヘルメットをかぶっていました。

色々あった末に私は大学に進学しないという選択をし、オロオロしているうちに結婚して子供が生まれ、会社員になり、そしていつの頃か野草社の石垣さんと名刺を交換したらしい（林修三さんによれば、林さんの有朋塾で石垣さんに引き合わせてくださったのが始めだそうです）。

初めて紫陽花邑に足を運んだのはそれからさらに数年後の１９９４年のこと。エミサリーのアート・オブ・リビング・セミナーが紫陽花邑で行われ、その通訳を務めたのがご縁でした。前日に法主様を囲む座談会があり（平成30年5～8月号の『おおやまと』参照）、その時が法主様にお会いした最初でしょうか。セミナー中も法主様は時々お顔を出されましたが、お忙しいようで、あまり長居をされることはありませんでした。

私が法主様のお話を（通訳としてではなく）お聞きしたのは、翌年、大倭神宮での新年祭であったと記憶しています。新年のご挨拶で「皆さん、人間は毎日死ぬことを考えなあきませんよ」とおっしゃったと記憶しています。私は驚きとともに、小学生の時に初めて読んだ漫画本『一休さん』を思い出していました。しゃれこうべのついた杖を持ち、「正月は冥土の旅の一里塚、目出度くもあり目出度くもなし」とうたいながら門付けをしたという逸話を思い出したのです。生きることは死に近づくこと。それを毎日考えんとアカンのやという法主様の言葉はとても衝撃的でした。以来、毎日考えるという生活が定着はしましたが、その成果についてはどうでしょうか。

大阪万博には興味がありませんでしたが、成田空港建設反対運動や東大紛争や70年安保には興味がありました。なぜ争うのだろうという疑問、どうしたら解決できるのだろうという問いが自分の内側にあったからだと思いますが、考えても考えても何もわからないのでした。

鉄パイプによる「日帝打倒」があえなく挫折した後には、共同体ブームやオカルトブームがあったと思います。私自身も「共同体」というものに興味を持ちました。人を正しく導くことのできる「主義」や「思想」を探していたのだろうと思います。当時の言葉で言えば「方法論」を求めていたわけです。しかし、鉄の規律が支配する思想グループが内ゲバで自滅し、高邁な理想を掲げる団体のメンバーが必ずしも幸せではないらしいことがわかってくると困ってしまいます。高みを目指すほど落ちていくような怖さがあります。

私は紫陽花邑にも、他の共同体にも身を置いた経験がありませんが、通訳という仕事のお陰で、色々とのぞき見させて頂く機会を得ることができました。特にアート・オブ・リビング・セミナーのお陰で、エミサリーの本部（サンライズ・ランチ：米国コロラド州）を何度か訪問できたことは大きな幸運でした。当時のサンライズは１５０人ほどが生活を共にする落ち着いた共同体でしたが、強力な指導者が他界した直後でもあり、次を模索する苦しみのようなものも感じられました。

私が通訳を務めたセミナーや、その後にサンライズを訪問した体験から私が理解したエミサリー（の創立者のユランダ）の教えは、「自分の外にある権威に決して自分をゆだねてはならない」ということです。これは、法主様によく聞かされてきた「宗教みたいなもん、信じたらあきませんよ」という言葉とまったく同じだと思います。ただユランダは、宗教だけでなく、自分をコントロールしようとする外部のあらゆる誘惑を拒絶しなければいけないと言ったのだと私は思います。

大倭には方法論がない（仲よくしろと言うだけで、どうしたら仲良くできるのか法主さんは教えてくれない）という批判（？）も聞いたことがありますが、方法論がないことこそがすばらしいのだと思います。自分の外にある「誰か」や「何か」に従うのでなく、自分の内側から発せられる偽りのない動機が自分を動かすことが大事なのではないかと思います。

私が時々大倭に行くのは、法主さまの言いつけを思い出すからです。自分の本当の、遠いご先祖さんたちにご挨拶したらホンマに喜んでくれてるのかなぁと思いつつ、神棚や磐座の前で「自分が一体何をしにこの世に来たのか未だにわからないのも困ったもんです」とか「先輩がたも互いに仲よくするのはきっと難しくて、いっぱい喧嘩したんでしょうね」とか思っています。（大阪府堺市）

あじさい日誌

5月12日　禊会。

5月15日　大倭神宮月次祭。

この日、登弥神社（大倭神宮の南、奈良市石木町）の宮座の一人今中さんが参加されました。

午前中、邑に棲みついたらしいアライグマのため、市役所から借りた捕獲用かごが瑞光院の庭にセットされました。

5月23日　大倭大本宮月次祭。昭和42年5月23日の法話をお聞きしました（『おおやまと』紙に未掲載）。

5月28日　午後2時から大倭会館において、大倭病院最後の決算報告会。（宗）大倭大本宮の一般会計報告と本年の予算会議が開かれました。

6月2日　朝9時30分から宮澤なつみさん（東京都板橋区）と中尾弥生さん（埼玉県狭山市）がウェブで『おおやまと』を読んだと初来邑。杉本順一さんが応接。平成4年7月の野草塾で話される法主様のDVDを見ていただきました。

6月6日　大倭神宮月次祭。

その後、杉本家が二六庵を離れることになり、教長さんが移転先（邑内）の荒神さんの清め祓いをされました。

夜、大倭会館にて邑倭の会。

6月9日　禊会。

6月10日　午前10時半から(宗)大倭大本宮・大倭病院の守護神として、紫陽花邑の頂上である天王山（てんのやま）に祀られていた東山坊（とうざんぼう）大善神のお社が教長さんにより大本宮拝殿に移されました。元の祠（ほこら）が山﨑正知・波留茂夫妻によって解体されました。藤ノ木台の宅地開発の頃、法主様が鎮められた天狗さん（武将霊）とのことです（平成3年12月号『おおやまと』の「大倭に棲む霊人たちの話」参照）。

大倭安宿苑では

（菅原園）

5月25日　都合で地域交流会が中止となり、食堂ホールで焼きそばやクレープ・綿菓子作り。

（須加宮寮）

5月23日　買物会でイズミヤ学園前店へ行きました。

（長曽根寮）

5月25日（デイ）「かたつむりの壁掛け飾り」の作品づくり。

5月26日（特養）喫茶倶楽部あじさい。子供の日と母の日にちなんだ演出に参加者19名。

（八重垣園）

毎週のカラオケクラブが、4月より通信カラオケで実施されています。

（茂毛路園）

6月3日　書道クラブに新しい先生が来られました。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

7月6日(土)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催第606回禊会

7月14日(日)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

※8月の禊会は例年通り大掃除禊ぎです。8月4日（日）でどうぞよろしくお願い致します。

＊月次祭（大倭神宮）

7月15日(祝)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大本宮）

7月23日(火)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

お知らせ

（宗）大倭大本宮・出版局

電話・FAX番号は

0742−45−1192

となりました。

大倭教立教開宣記念祭　東光大祭　祖霊祭　各ご案内

令和元年8月15日(木曜日・旧7月15日)

立教開宣記念祭

午前10時より　大倭神宮

東光大祭　祖霊祭

午前11時30分より、東方の碑でご挨拶

正午から、奥津斎庭で祖霊祭

祖霊祭が終わり次第、教長さんをお迎えして、拝殿で東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の行われている間は、拝殿では法主様の東光大祭での法話などを聞いていただきます。

ご注意　祖霊祭の経木への書き込み受付は7月25日までとさせていただきます。

表紙写真によせて

青森県弘前市　石田　勝利

米余りの今日、稲地が戦いの原因になるようなことは忘れ去られた。

本州北端の津軽平野は十三湖の底地の湿地、沼地で、琵琶湖ほどの広さなのに稲作に不敵な地であった。その中に20キロ四方ほどの貴重な極小地で、200年にわたる争奪戦が繰り広げられた。

鎌倉幕府の地頭は小田原曽我氏、後醍醐天皇の東北将軍と言われた北畠氏の拠点となり、後は山と冷風害の南部から侵略された。

クライマックスは津軽為信による、端午の日の祝宴早朝の南部氏奇襲。南部と津軽の決戦は決着して、津軽統一が成された。決戦地は天然の要塞で小高い山、後方に火山活動で豊富に噴出する山脈、前は大河が流れ二重三重の堀が作られていたのだが、落城。

現在は、春は桜、桜で遠くからピンクの三角山として目印にされている。加えて植えられた紫陽花が増え、初夏には県内一の「あじさい祭り」が催されている。

山道に祀られ道案内係りをしているような、蓮の花を手にした観音様の姿が目に止まり、思わず悩みを打ち明けてみた。